校異源氏物語・夕かほ

六条わたりの御しのひありきのころ内よりまかて給なかやとりに大弐のめのとのいたくわつらひてあまになりにけるとふらはむとて五条なるいゑたつねておはしたり御くるまいるへきかとはさしたりけれは人してこれ光めさせてまたせ給ける程むつかしけなるおほちのさまをみはたし給へるにこのいゑのかたはらにひかきといふものあたらしうしてかみははしとみ四五けむはかりあけわたしてすたれなともいとしろうすゝしけなるにおかしきひたいつきのすきかけあまたみえてのそくたちさまよふらむしもつかたおもひやるにあなかちにたけたかき心地そするいかなるものゝつとへるならむとやうかはりておほさる御くるまもいたくやつしたまへりさきもおはせ給はすたれとかしらむとうちとけ給てすこしさしのそきたまへれはかとはしとみのやうなるをしあけたるみいれのほとなくものはかなきすまひをあはれにいつこかさしてとおもほしなせはたまのうてなもおなしこと也きりかけたつものにいとあをやかなるかつらの心ちよけにはひかゝれるにしろき花そおのれひとりゑみのまゆひらけたるをちかた人に物申とひとりこち給をみすいしんついゐてかのしろくさけるをなむゆふかほと申侍はなのなは人めきてかうあやしきかきねになんさき侍けると申すけにいとこいゑかちにむつかしけなるわたりのこのもかのもあやしくうちよろほいてむね

くしからぬのきのつまなとにはひまつはれたるをくちをしの花の契やひとふさおりてまいれとのたまへはこのをしあけたるかとにいりておるさすかにされたるやりとくちにきなるすゝしのひとへはかまなかくきなしたるわらはのおかしけなるいてきてうちまねくしろきあふきのいたうこかしたるをこれにをきてまいらせよ枝もなさけなけなめる花をとてとらせたれはかとあけてこれ光のあそんいてきたるしてたてまつらすかきををきまとはし侍ていとふひんなるわさなりやものゝあやめみ給へわくへき人も侍らぬわたりなれとらうかはしきおほちにたちおはしましてとかしこまり申すひきいれており給ふこれみつかあにのあさりむこのみかはのかみむすめなとわたりつとひたるほとにかくおはしましたるよろこひをまたなきことにかしこまるあま君もおきあかりておしけなき身なれとすてかたくおもふたまへつる事はたゝかく御まへにさふらひ御らむせら

るゝことのかはり侍なん事をくちおしくおもひたまへたゆたいしかといむことのしるしによみかへりてなんかくわたりおはしますをみたまへ侍ぬれはいまなむあみた仏の御ひかりも心きよくまたれ侍へきなときこえてよはけになく日ころおこたりかたくものせらるゝをやすからすなけきわたりつるにかくよをはなるゝさまにものしたまへはいとあはれにくちをしうなんいのちなかくてなをくらゐたかくなとみなし給へさてこそこゝのしなのかみにもさはりなくむまれ給はめこの世にすこしうらみのこるはわろきわさとなむきくなとなみたくみての給かたほなるをたにめのとやうのおもふへき人はあさましうまをにみなすものをましていとおもたゝしうなつさひつかうまつりけん身もいたはしうかたしけなくおもほゆへかめれはすゝろになみたかちなりこともはいとみくるしとおもひてそむきぬるよのさりかたきやうに身つからひそみ御らむせられ給とつきしろひめくはす君はいとあはれとおもほしていはけなかりけるほとに思へき人

くのうちすてゝものし給にけるなこりはくゝむ人あまたあるやうなりしかとしたしくおもひむつふるすちは又なくなんおもほえし人となりてのちはかきりあれはあさゆふにしもえみたてまつらす心のまゝにとふらひまうつる事はなけれと猶ひさしうたいめむせぬ時は心ほそくおほゆるをさらぬわかれはなくもかなとなんこまやかにかたらひ給てをしのこひ給へるそてのにほひもいと所せきまてかほりみちたるにけによにおもへはをしなへたらぬ人のみすくせそかしとあま君をもとかしとみつることもみなうちしほたれけりすほうなと又またはしむへき事なとをきてのたまはせていて給とてこれみつにしそくめしてありつるあふき御らむすれはもてならしたるうつりかいとしみふかうなつかしくておかしうすさみかきたり

心あてにそれかとそみるしら露のひかりそへたるゆふかほの花そこはかとなくかきまきらはしたるもあてはかにゆへつきたれはいとおもひのほかにおかしうおほえ給これみつにこのにしなるいゑはなに人のすむそとひきゝたりやとのたまへはれゐのうるさき御心とはおもへともえさは申さてこの五六日こゝに侍れとはうさの事をおもふ給へあつかひはへるほとにとなりの事はえきゝ侍らすなとはしたなやかにきこゆれはにくしとこそ思たれなされとこのあふきのたつぬへきゆへありてみゆるをなをこのはたりの心しれらんものをめしてとへとのたまへはいりてこのやともりなるおのこをよひてとひきくやうめいのすけなる人のいゑになんはへりけるおとこはゐ中にまかりてめなんわかく事このみてはらからなと宮つかへ人にてきかよふと申くはしき事はしも人のえしり侍らぬ

にやあらむときこゆさらはその宮つかへ人ななりしたりかほにものなれていへるかなとめさましかるへききはにやあらんとおほせとさしてきこゑかゝれる心のにくからすゝくしかたきそれゐのこのかたにはをもからぬ御心なめるかし御たゝうかみにいたうあらぬさまにかきかへ給て

よりてこそそれかともみめたそかれにほの　くみつる花のゆふかほありつるみすいしんしてつかはすまたみぬ御さま也けれといとしるくおもひあてられ給へる御そはめをみすくさてさしおとろかしけるをいらへたまはてほとへけれはなまはしたなきにかくわさとめかしけれはあまへていかにきこえむなといひしろふへかめれとめさましとおもひてすいしんはまいりぬ御さきのまつほのかにていとしのひていて給ふはしとみはおろしてけりひま　くよりみゆるひのひかりほたるよりけにほのかにあはれなり御心さしの所には木たちせんさいなとなへての所ににすいとのとかにこゝろにくくすみなし給へりうちとけぬ御ありさまなとのけしきことなるにありつるかきねおもほしいてらるへくもあらすかしつとめてすこしねすくし給てひさしいつるほとにいてたまふあさけのすかたはけに人のめてきこえんもことはりなる御さまなりけりけふもこのしとみのまへわたりし給ふきしかたもすき給けんわたりなれとたゝはかなきひとふしに御心とまりていかなる人のすみかならんとはゆきゝに御めとまり給けりこれ光日ころありてまいれりわつらひ侍人猶よはけに侍れはとかくみたまひあつかひてなむなときこえてちかくまいりよりてきこゆおほせられしのちなんとなりの事しりて侍ものよひてとはせ侍しかとはか　くしくも申侍らすいとしのひてさ月のころほひよりものし給人なんあるへけれとその人とはさらに家のうちの人にたにしらせすとなん申すとき　くなかゝきのかひまみし侍にけにわかき女ともものすきかけみえ侍しひらたつものかことはかりひきかけてかしつく人侍なめり昨日ゆふ日のなこりなくさしいりて侍しにふみかくとてゐて侍し人のかほこそいとよく侍しかものおもへるけはひしてある人ひともしのひてうちなくさまなとなむしるくみえ侍ときこゆ君うちゑみ給てしらはやとおもほしたりおほえこそおもかるへき御身のほとなれと御よはひのほと人のなひきめてきこえたるさまなと思にはすき給はさらんもなさけなくさう　くしかるへしかし人のうけひかぬほとにてたに猶さりぬへきあたりの事はこのましうおほゆるものをとおもひをりもしみたまへうる事もや侍とはかなきつゐてつくりいてゝせうそこなとつかはしたりきかきなれたるてしてくちとくかへり事なとし侍きいとくちをしうはあらぬわか人ともなん侍めるときこゆれはなをいひよれたつねよらては

さう　くしかりなんとの給ふかのしもかしもと人の思すてしすまひなれとそのなかにも思のほかにくちおしからぬをみつけたらはとめつらしくおもほすなりけりさてかのうつせみのあさましくつれなきをこのよの人にはたかひておほすにおいらかならましかは心くるしきあやまちにてもやみぬへきをいとねたくまけてやみなんを心にかゝらぬおりなしかやうのなみ　くまてはおもほしかゝらさりつるをありしあま夜のしなさためのゝちいふかしくおもほしなるしな　くあるにいとゝくまなくなりぬる御心なめりかしうらもなくまちきこえかほなるかたつかた人をあはれとおほさぬにしもあらねとつれなくてきゝゐたらむ事のはつかしけれはまつこなたの心みはててとおほすほとにいよの介のほりぬまついそきまいれりふなみちのしわさとてすこしくろみやつれたるたひすかたいとふつゝかに心つきなしされと人もいやしからぬすちにかたちなとねひたれときよけにてたたならすけしきよしつきてなとそありけるくにの物語なと申すにゆけたはいくつととはまほしくおほせとあひなくまはゆくて御心のうちにおほしいつる事もさま　くなりものまめやかなるおとなをかくおもふもけにおこかましくうしろめたきわさなりやけにこれそなのめならぬかたわなへかりけるとむまのかみのいさめおほしいてていとおしきにつれなき心はねたけれと人のためはあはれとおほしなさるむすめをはさるへき人にあつけてきたの方をはゐてくたりぬへしときゝ給にひとかたならす心あはたゝしくていまひとたひはえあるましきことにやとこきみをかたらひ給へと人の心をあわせたらんことにてたにかろらかにえしもまきれ給ましきをましてにけなきことにおもひていまさらにみくるしかるへしと思はなれたりさすかにたえておもほしわすれなん事もいといふかひなくうかるへきことに思てさるへきおり　くの御いらへなとなつかしくきこえつゝなけのふてつかひにつけたる事のはあやしくらうたけにめとまるへきふしくはへなとしてあはれとおほしぬへき人のけはひなれはつれなくねたきものゝわすれかたきにおほすいまひとかたはぬしつよくなるともかはらすうちとけぬへくみえしさまなるをたのみてとかくきゝ給へと御心もうこかすそありける秋にもなりぬ人やりならすこゝろつくしにおほしみたるゝ事ともありておほとのにはたえまをきつゝうらめしくのみおもひきこえ給へり六条わたりにもとけかたかりし御けしきをおもむけきこえ給てのちひき返しなのめならんはいとをしかしされとよそなりし御心まとひのやうにあなかちなる事はなきもいかなる事にかとみえたりをんなはいとものをあまりなるまておほししめたる御心さまにてよはひのほともにけなく人のもりきかむにいとゝかくつらき御よか

れのねさめ　くおほししほるることいとさま　くなり霧のいとふかきあしたいたくそゝのかされ給てねふたけなるけしきにうちなけきつゝいて給ふを中将のおもとみかうしひとまあけてみたてまつりをくり給へとおほしくみき丁ひきやりたれは御くしもたけてみいたし給へりせむさいの色　くみたれたるをすきかてにやすらひ給へるさまけにたくひなしらうのかたへおはするに中将の君御ともにまいるしをんいろのおりにあひたるうすもののもあさやかにひきゆひたるこしつきたおやかになまめきたりみかへり給てすみのまのかうらんにしはしひきすへたまへりうちとけたらぬもてなしかみのさかりはめさましくもとみたまふ

咲花にうつるてふなはつゝめともおらてすきうきけさのあさかほいかゝすへきとてゝをとらへたまへれはいとなれてとく

あさきりのはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとそみるとおほやけことにそきこえなすおかしけなるさふらひわらはのすかたこのましうことさらめきたるさしぬきのすそ露けゝにはなのなかにましりてあさかほおりてまいるほとなとゑにかゝまほしけなりおほかたにうちみたてまつる人たに心とめたてまつらぬはなしものゝなさけしらぬやまかつもはなのかけにはなをやすらはまほしきにやこの御ひかりをみたてまつるあたりはほと　くにつけてわかかなしとおもふむすめをつかうまつらせはやとねかひもしはくちおしからすと思いもうとなともたる人はいやしきにても猶この御あたりにさふらはせんと思よらぬはなかりけりましてさりぬへきついての御ことの葉もなつかしき御けしきをみたてまつる人のすこしものゝこゝろおもひしるはいかゝはおろかに思きこえんあけくれうちとけてしもおはせぬを心もとなきことにおもふへかめりまことやかのこれみつかあつかりのかいまみはいとよくあないみとりて申すその人とはさらにえおもひえ侍らす人にいみしくかくれしのふるけしきになむみえ侍をつれ　くなるまゝにみなみのはしとみあるなかやにわたりきつつくるまのをとすれはわかきものともゝそきなとすへかめるにこのしうとおほしきもはひわたる時はへかめるかたちなむほのかなれといとらうたけに侍へる一日さきをひてわたるくるまの侍しをのそきてわらはへのいそきて右近の君こそまつものみ給へ中将とのこそこれよりわたり給ぬれといへはまたよろしきおとないてきてあなかまとてかくものからいかてさはしるそいてみむとてはひわたるうちはしたつ物をみちにてなむかよひ侍いそきくるものはきぬのすそをものにひきかけてよろほひたふれてはしよりもおちぬへけれはいてこのかつらきのかみこそさか

しうしをきたれとむつかりてものゝそきのこゝろもさめぬめりき君は御なをし
すかたにてみすいしんともありしなにかしくれかしとかすえしは頭中将のす
いしんそのことねりわらはをなんしるしにいひはへりしなときこゆれはたしか
にそのくるまをそみましとのたまひてもしかのあはれにわすれさりし人にやと
おもほしよるもいとしらまほしけなる御けしきをみてわたくしのけさうもいと
よくしをきてあないものこる所なくみ給へをきなからたゝわれとちとしらせて
ものなといふわかきおもとの侍をそらおほれしてなむかくれまかりありくいと
よくかくしたりとおもひてちいさきこともなとの侍かことあやまりしつへきも
いひまきらはしてまた人なきさまをしゐてつくり侍なとかたりてわらふあま君
のとふらひにものせんつゐてにかいまみせさせよとのたまひけりかりにてもや
とれるすまひのほとを思にこれこそかの人のさためあなつりししものしなゝら
めそのなかにおもひのほかにおかしき事もあらはなとおほすなりけりこれみつ
いさゝかの事も御心にたかはしと思にをのれもくまなきすき心にていみしくた
はかりまとひありきつゝしひておはしまさせそめてけりこのほとの事くた　く
しけれはれいのもらしつ女さしてその人とたつねいて給はねはわれもなのりを
し給はていとわりなくやつれ給つゝれいならすおりたちありき給はをろかにお
ほされぬなるへしとみれはわかむまをはたてまつりて御ともにはしりありくけ
さうひとのいとものけなきあしもとをみつけられて侍らんときからくもあるへ
かなとわふれと人にしらせ給はぬままにかのゆふかほのしるへせしすいしんは
かりさてはかほむけにしるましきわらはひとりはかりそゐておはしけるもし思
よるけしきもやとてとなりになかやとりをたにし給はす女もいとあやしく心え
ぬ心ちのみして御つかひに人をそへあか月の道をうかゝはせ御ありかみせむと
たつぬれとそこはかとなくまとはしつゝさすかにあはれにみてはえあるましく
この人の御心にかゝりたれはひむなくかろ　くしき事とおもほしかへしわひつ
ゝいとしは　くおはしますかゝるすちはまめ人のみたるゝおりもあるをいとめ
やすくしつめ給て人のとかめきこゆへきふるまひはし給はさりつるをあやしき
まてけさのほとひるまのへたてもおほつかなくなとおもひわつらはれ給へはか
つはいとものくるおしくさまてこころとゝむへき事のさまにもあらすといみし
く思さまし給に人のけはひいとあさましくやはらかにおほときてものふかくを
もきかたはをくれてひたふるにわかひたるものからよをまたしらぬにもあらす
いとやむことなきにはあるましいつくにいとかうしもとまる心そとかへす　く
おほすいとことさらめきて御さうそくをもやつれたるかりの御そをたてまつる

さまをかへかほをもほのみせたまはす夜ふかきほとに人をしつめていていりなとし給へはむかしありけんものゝへむけめきてうたておもひなけかるれと人の御けはひはたてさくりもしるきわさなりけれはたれはかりにかはあらむ猶このすきものゝしいてつるわさなめりとたいふをうたかひなからせめてつれなくしらすかほにてかけておもひよらぬさまにたゆますあされありけはいかなることにかと心えかたく女かたもあやしうやうたかひたる物おもひをなむしける君もかくうらなくたゆめてはひかくれなはいつこをはかりとか我もたつねんかりそめのかくれかとはたみゆめれはいつかたにも　くうつろひゆかむ日をいつともしらしとおほすにをひまとはしてなのめにおもひなしつへくはたゝかはかりのすさひにてもすきぬへきことをさらにさてすくしてんとおほされす人めをおほしてへたてをき給よな　くなとはいとしのひかたくくるしきまておほえ給へはなをたれとなくて二条院にむかへてんもしきこえありてひんなかるへき事なりともさるへきにこそは我心なからいとかく人にしむ事はなきをいかなる契にかはありけんなとおもほしよるいさいと心やすき所にてのとかにきこえんなとかたらひ給へはなをあやしうかくのたまへとよつかぬ御もてなしなれはものおそろしくこそあれといとわかひていへはけにとほをゑまれ給てけにいつれかきつねなるらんなたゝはかられ給へかしとなつかしけにのたまへは女もいみしくなひきてさもありぬへく思たりよになくかたはなる事也ともひたふるにしたかふ心はいとあはれけなる人とみたまふになをかの頭中将のとこなつうたかはしくかたりし心さまつおもひいてられ給へとしのふるやうこそはとあなかちにもとひいてたまはすけしきはみてふとそむきかくるへきこころさまなとはなけれはかれ　くにとたえをかむおりこそはさやうにおもひかはることもあらめ心なからもすこしうつろふ事あらむこそあはれなるへけれとさへおほしけり八月十五夜くまなき月かけひまおほかるいた屋のこりなくもりきてみならひたまはぬすまゐのさまもめつらしきにあか月ちかくなりにけるなるへしとなりのいゑ

　くあやしきしつのおのこゑ　くめさましてあはれいとさむしやことしこそなりはひにもたのむところすくなくゐ中のかよひも思かけねはいと心ほそけれきたとのこそきゝ給ふやなといひかはすもきこゆいとあはれなるをのかしゝのいとなみにおきいてゝそゝめきさはくもほとなきを女いとはつかしくおもひたりえんたちけしきはまむ人はきえもいりぬへきすまひのさまなめりかしされとのとかにつらきもうきもかたはらいたきことも思いれたるさまならてわかもてなしありさまはいとあてはかにこめかしくてまたなくらうかはしきとなりのよう

いなさをいかなる事ともきゝしりたるさまならねはなか　くはちかゝやかんよりはつみゆるされてそみえけるこほ　くとなる神よりもおとろ　くしくふみとゝろかすからうすのをともまくらかみとおほゆるあなみゝかしかましとこれにそおほさるゝなにのひひきともきゝいれ給はすいとあやしうめさましきおとなひとのみきゝたまふくた　くしきことのみおほかりしろたへの衣うつきぬたのをともかすかにこなたかなたきゝわたされそらとふかりのこゑとりあつめてしのひかたきことおほかりはしちかきおまし所なりけれはやりとをひきあけてもろともにみいたしたまふほとなきにはにされたるくれ竹せむさいのつゆはなをかゝる所もおなしこときらめきたりむしの声　くみたりかはしくかへのなかのきり　くすたにまとをにきゝならひたまへる御みゝにさしあてたるやうになきみたるゝをなか　くさまかへておほさるゝも御心さしひとつのあさからぬによろつのつみゆるさるゝなめりかししろきあはせうす色のなよゝかなるをかさねてはなやかならぬすかたいとらうたけにあえかなる心ちしてそことゝりたてゝすくれたる事もなけれとほそやかにたを　くとして物うちいひたるけはひあな心くるしとたたいとらうたくみゆ心はみたるかたをすこしそへたらはとみたまなから猶うちとけてみまほしくおほさるれはいさたゝこのわたりちかき所に心やすくてあかさむかくてのみはいとくるしかりけりとのたまへはいかてかにわかならんといとおいらかにいひてゐたりこの世のみならぬ契なとまてたのめたまふにうちとくる心はへなとあやしくやうかはりてよなれたる人ともおほえねは人のおもはむ所もえはゝかり給はて右近をめしいてゝすいしんをめさせたまひて御くるまひきいれさせ給このある人　くもかゝる御心さしのおろかならぬをみしれはおほめかしなからたのみかけきこえたりあけかたもちかうなりにけりとりのこゑなとはきこえてみたけさうしにやあらんたゝおきなひたるこゑにぬかつくそきこゆるたちゐのけはひたへかたけにおこなふいとあはれにあしたの露にことならぬよをなにをむさほる身のいのりにかときゝ給ふ南無富来導師とそおかむなるかれきゝたまへこの世とのみはおもはさりけりとあはれかりたまひて

　うはそくかおこなふみちをしるへにてこむ世もふかき契たかふな長生殿のふるきためしはゆゝしくてはねをかはさむとはひきかへてみろくのよをかねたまふゆくさきの御たのめいとこちたし

　さきの世の契しらるゝ身のうさにゆくすゑかねてたのみかたさよかやうのすちなともさるは心もとなかめりいさよふ月にゆくりなくあくかれんことを女

は思やすらひとかくの給ふほとにはかにくもかくれてあけゆく空いとおかしはしたなきほとにならぬさきにとれゐのいそきいて給てかろらかにうちのせたまへれは右近そのりぬるそのわたりちかきなにかしの院におはしましつきてあつかりめしいつる程あれたるかとのしのふくさしけりてみあけられたるたとしへなくこくらしきりもふかく露けきに簾をさへあけ給へれは御そてもいたくぬれにけりまたかやうなることをならはさりつるを心つくしなることにもありけるかな

いにしへもかくやは人のまとひけん我またしらぬ篠の目のみちならひたまへりやとのたまふ女はちらひて

山のはの心もしらてゆく月はうはの空にて影やたえなむ心ほそくとてものおそろしうすこけにおもひたれはかのさしつとひたるすまひのならひならんとおかしくおほす御車いれさせてにしのたいにおましなとよそふほとかうらんに御くるまひきかけてたちたまへり右近ゑんある心ちしてきしかたの事なとも人しれす思ひいてけりあつかりいみしくけいめいしありくけしきにこの御ありさましりはてぬほの　くとものみゆるほとにおりたまひぬめりかりそめなれときよけにしつらひたり御ともに人もさふらはさりけりふひんなるわさかなとてむつましきしもけいしにて殿にもつかうまつるものなりけれはまいりよりてさるへき人めすへきにやなと申さすれとことさらに人くましきかくれかもとめたるなりさらに心よりほかにもらすなとくちかためさせ給御かゆなといそきまいらせたれととりつく御まかなひうちあはすまたしらぬことなる御たひねにおきなかゝはとちきり給ことよりほかのことなしひたくるほとにおき給てかうしてつからあけたまふいといたくあれて人めもなくはる　くとみわたされてこたちいとうとましくものふりたりけちかきくさきなとはことにみところなくみな秋のゝらにていけもみくさにうつもれたれはいとけうとけになりにける所かなへちなうのかたにそさうしなとして人すむへかめれとこなたははなれたりけうとくもなりにける所かなさりともおになともわれをはみゆるしてんとの給ふかほはなをかくし給へれと女のいとつらしとおもへれはけにかはかりにてへたてあらむもことのさまにたかひたりとおほして

夕露にひもとく花は玉ほこのたよりにみえしえにこそありけれつゆのひかりやいかにとの給へはしりめにみおこせて

光ありとみしゆふかほのうは露はたそかれ時のそらめなりけりとほのかにいふおかしとおほしなすけにうちとけたまへるさまよになくところからまいて

ゆゝしきまてみえ給つきせすへたてたまへるつらさにあらはさしとおもひつるものをいまたになのりし給へいとむくつけしとの給へとあまの子なれはとてさすかにうちとけぬさまいとあひたれたりよしこれも我からなめりとうらみかつはかたらひくらし給これみつたつねきこえて御くた物なとまいらす右近かいはむことさすかにいとをしけれはちかくもえさふらひよらすかくまてたとりありき給ふおかしうさもありぬへきありさまにこそはとをしはかるにも我いとよく思ひよりぬへかりしことをゆつりきこえて心ひろさよなとめさましうおもひをるたとしへなくしつかなるゆふへの空をなかめ給ておくのかたはくらう物むつかしと女はおもひたれははしの簾をあけてそひふし給り夕はへをみかはして女もかゝるありさまを思ひのほかにあやしき心地はしなからよろつのなけきわすれてすこしうちとけ行けしきいとらうたしつと御かたはらにそひくらしてものをいとおそろしと思ひたるさまわかう心くるしかうしとくおろし給ておほとなふらまいらせてなこりなくなりにたる御ありさまにてなを心のうちのへたてのこしたまへるなむつらきとうらみ給うちにいかにもとめさせ給らんをいつこにたつぬらんとおほしやりてかつはあやしの心や六条はたりにもいかに思みたれたまふらんうらみられんにくるしうことはりなりといとをしきすちはまつおもひきこえ給なに心もなきさしむかひをあはれとおほすまゝにあまり心ふかくみる人もくるしき御ありさまをすこしとりすてはやと思くらへられ給けるよひすくるほとすこしねいり給へるに御まくらかみにいとおかしけなる女いてをのかいとめてたしとみたてまつるをはたつねおもほさてかくことなることなき人をいておはしてときめかし給こそいとめさましくつらけれとてこの御かたはらの人をかきをこさむとすとみ給物におそはるゝ心ちしておとろき給へれは火もきえにけりうたておほさるれはたちをひきぬきてうちをき給て右近をおこし給これもおそろしと思たるさまにてまいりよれりわた殿なるとのゐ人おこしてしそくさしてまいれといへとのたまへはいかてかまからんくらうてといへはあなわか　くしとうちわらひ給ひて手をたゝき給へはやまひこのこたふるこゑいとうとまし人えきゝつけてまいらぬにこの女君いみしくわなゝきまとひていかさまにせむとおもへりあせもしとゝになりてわれかのけしきなり物をちをなんわりなくせさせたまふ本上にていかにおほさるゝにかと右近もきこゆいとかよはくてひるもそらをのみみつるものをいとおしとおほしてわれ人をおこさむ手たゝけは山ひこのこたふるいとうるさしこゝにしはしちかくとて右近をひきよせ給てにしのつまとにいてゝとををしあけ給へれはわたとのゝ火もきえにけり風す

こしうち吹たるに人はすくなくてさふらふかきりみなねたりこの院のあつかりのこむつましくつかひたまふわかきおのこ又うへはらはひとりれゐのすい身はかりそありけるめせは御こたへしておきたれはしそくさしてまいれすいしんもつるうちしてたえすこわつくれとおほせよ人はなれたる所に心とけていぬるものかこれ光の朝臣のきたりつらんはとゝはせ給へはさふらひつれとおほせこともなしあか月に御むかへにまいるへきよし申てなんまかて侍りぬるときこゆこのかう申す物はたきくちなりけれはゆつるいとつき　くしくうちならしてひあやうしといふ　くあつかりかさうしのかたにいぬなりうちをおほしやりてなたいめんはすきぬらんたきくちのとのゐ申いまこそとをしはかり給はまたいたうふけぬにこそは返いりてさくり給へは女君はさなからふして右近はかたはらにうつふし　くたりこはなそあなものくるおしのものをちやあれたる所はきつねなとやうのものゝ人をおひやかさんとてけおそろしうおもはするならんまろあれはさやうの物にはおとされしとてひきおこし給いとうたてみたり心ちのあしう侍れはうつふし　くて侍や御まへにこそわりなくおほさるらめといへはそよなとかうはとてかひさくり給ふにいきもせすひきうこかしたまへとなよ　くとしてわれにもあらぬさまなれはいといたくわかひたる人にて物にけとられぬるなめりとせむかたなき心ちし給しそくもてまいれり右近もうこくへきさまにもあらねはちかきみ几帳をひきよせてなをもてまいれとの給れいならぬ事にて御まへちかくもえまいらぬつゝましさになけしにもえのほらすなをもてこや所にしたかひてこそとてめしよせてみ給へはたゝこのまくらかみにゆめにみえつるかたちしたる女おもかけにみえてふときえうせぬむかしの物かたりなとにこそかゝる事はきけといとめつらかにむくつけゝれとまつこの人いかになりぬるそとおもほす心さはきに身のうへもしられ給はすそひふしてやゝとおとろかし給へとたゝひえにひえ入ていきはとくたえはてにけりいはむかたなしたのもしくいかにといひふれ給へき人もなしほうしなとをこそはかゝるかたのたのもしきものにはおほすへけれとさこそつよかり給へとわかき御心にていふかひなくなりぬるをみたまふにやるかたなくてつといたきてああ君いきいて給へいといみしきめなみせ給そとのたまへとひえ入にたれはけはひものうとくなりゆく右近はたゝあなむつかしと思ける心ちみなさめてなきまとふさまいといみし南殿のおにのなにかしのおとゝおひやかしけるたとひをおほしいてゝ心つよくさりともいたつらになりはて給はしよるのこゑはおとろ　くしあなかまといさめ給ていとあはたゝしきにあきれたる心ちし給このおとこをめしてこゝにいとあやし

う物におそはれたる人のなやましけなるをたたいまこれみつのあそむのやとる
所にまかりていそきまいるへきよしいへとおほせよなにかしあさりそこにもの
するほとならはこゝにくへきよししのひていへかのあま君なとのきかむにおと
ろ　くしくいふなかゝるありきゆるさぬ人なりなとものゝたまふやうなれとむ
ねふたかりてこの人をむなしくしなしてんことのいみしくおほさるゝにそへて
大かたのむく　くしさたとへんかたなし夜中もすきにけんかし風のやゝあら
　くしう吹たるはまして松のひゝきこふかくきこえてけしきあるとりのからこ
ゑになきたるもふくろうはこれにやとおほゆうち思めくらすにこなたかなたけ
とおくうとましきに人こゑはせすなとてかくはかなきやとりはとりつるそとく
やしさもやらんかたなし右近は物もおほえす君につとそひたてまつりてわなゝ
きしぬへしまたこれもいかならんと心そらにてとらへ給へりわれひとりさかし
き人にておほしやるかたそなきや火はほのかにまたゝきてもやのきはにたてた
るひやう風のかみこゝかしこのくま　くしくおほえ給にものゝあしおとひし
　くとふみならしつゝうしろより　くくる心ちすこれ光とくまいらなんとおほ
すありかさためぬものにてこゝかしこ尋けるほとに夜のあくるほとのひさしさ
は千世をすくさむ心ちし給からうして鳥のこゑはるかにきこゆるにいのちをか
けてなにのちきりにかゝるめをみるらむ我心なからかゝるすちにおほけなくあ
るましき心のむくひにかくきしかたゆくさきのためしとなりぬへきことはある
なめりしのふともよにあることかくれなくてうちにきこしめさむをはしめて人
の思いはん事よからぬわらはへのくちすさひになるへきなめりあり　くておこ
かましきなをとるへきかなとおほしめくらすからうしてこれみつのあそんまい
れり夜中あか月といはす御心にしたかへるものゝこよひしもさふらはてめしに
さへおこたりつるをにくしとおほすものからめしいれてのたまひいてんことの
あえなきにふともゝのもいはれ給はす右近たいふのけはひきくにはしめよりの
事うち思いてられてなくを君もえたへ給はて我ひとりさかしかりいたきも給へ
りけるにこの人にいきをのへたまひてそかなしきこともおほされけるとはかり
いといたくえもとゝめすなきたまふやゝためらひてこゝにいとあやしきことの
あるをあさましといふにもあまりてなんありかゝるとみの事にはす経なとをこ
そはすなれとてそのことゝもゝせさせんくわんなともたてさせむとてあさりも
のせよといひつるはとの給に昨日山へまかりのほりにけりまついとめつらかな
ることにも侍かなかねてれいならす御心地ものせさせ給ことや侍つらんさるこ
ともなかりつとてなきたまふさまいとおかしけにらうたくみたてまつる人もい

とかなしくてをのれもよゝとなきぬさいへととしうちねひ世中のとある事としほしみぬる人こそものゝおりふしはたのもしかりけれいつれも　くわかきとちにていはむかたもなけれとこの院もりなとにきかせむことはいとひむなかるへしこの人ひとりこそむつましくもあらめをのつからものいひもらしつへきくゑそくもたちましりたらむまつこの院をいておはしましねといふさてこれより人すくなゝる所はいかてかあらんとのたまふけにさそ侍らんかのふるさとは女房なとのかなしひにたへすなきまとひ侍らんにとなりしけくとかむるさと人おほく侍らんにをのつからきこえ侍らんを山寺こそなをかやうの事をのつからゆきましり物まきるゝこと侍らめと思まはしてむかしみたまへし女房のあまにて侍ひむかし山の辺にうつしたてまつらんこれみつかちちの朝臣のめのとに侍しものゝみつわくみてすみ侍なりあたりは人しけきやうに侍れといとかこかに侍りときこえてあけはなるゝほとのまきれに御車よすこの人をえいたき給ふましけれはうはむしろにをしくゝみてこれみつのせたてまつるいとさゝやかにてうとましけもなくらうたけなりしたゝかにしもえせねはかみはこほれいてたるもめくれまとひてあさましうかなしとおほせはなりはてんさまをみむとおほせとはや御むまにて二条院へおはしまさん人さはかしくなり侍らぬほとにとて右近をそへてのすれはかちより君にむまはたてまつりてくゝりひきあけなとしてかつはいとあやしくおほえぬをくりなれと御けしきのいみしきをみたてまつれは身をすててゆくに君は物もおほえ給はすわれかのさまにておはしつきたり人ゝいつこよりおはしますにかなやましけにみえさせ給なといへとみ丁のうちに入給てむねをゝさへておもふにいといみしけれはなとてのりそひていかさりつらんいきかへりたらんときいかなる心地せんみすてゝゆきあかれにけりとつらくやおもはむと心まとひの中にもおもほすに御むねせきあくる心ちし給御くしもいたく身もあつき心ちしていとくるしくまとはれたまへはかくはかなくて我もいたつらになりぬるなめりとおほすひたかくなれとおきあかりたまはねは人ゝあやしかりて御かゆなとそゝのかしきこゆれとくるしくていと心ほそくおほさるゝにうちより御つかひあり昨日えたつねいてたてまつらさりしよりおほつかなからせ給大殿のきんたちまいり給へと頭中将はかりをたちなからこなたにいりたまへとのたまひてみすのうちなからの給ふめのとにて侍ものゝこの五月のころをいよりおもくわつらひ侍しかかしらそりいむことうけなとしてそのしるしにやよみかへりたりしをこのころまたおこりてよはくなんなりにたるいま一たひとふらひみよと申たりしかはいときなきよりなつさひしものゝいまはのきさ

みにつらしとやおもはんとおもふ給へてまかれりしにそのいゑなりけるしも人のやまひしけるかにはかにいてあえてなくなりにけるをおちはゝかりて日をくらしてなんとりいて侍けるをきゝつけ侍しかは神事なるころいとふひんなることゝ思たまへかしこまりてえまいらぬなりこのあか月よりしはふきやみにや侍らんかしらいといたくてくるしく侍れはいとむらいにてきこゆることなとのたまふ中将さらはさるよしをこそそうし侍らめよへも御あそひにかしこくもとめたてまつらせ給て御気色あしく侍りきときこえ給てたちかへりいかなるいきふれにかゝらせ給そやのへやらせ給ことこそまことゝ思給へられねといふにむねつふれ給てかくこまかにはあらてたゝおほえぬけからひにふれたるよしをそうし給へいとこそたい　くしく侍れとつれなくの給へと心の中にはいふかひなくかなしきことをおほすに御心ちもなやましけれは人にめもみあはせたまはすくら人の弁をめしよせてまめやかにかゝるよしをそうせさせ給大殿なとにもかゝることありてえまいらぬ御せうそこなときこえ給日くれてこれみつまいれりかゝるけからひありとのたまひてまいる人　くもみなたちなからまかつれは人しけからすめしよせていかにそいまはとみはてつやとのたまふまゝに袖を御かほにをしあてゝなき給これ光もなく　くいまはかきりにこそは物し給めれなか

　くとこもり侍らんもひんなきをあすなん日よろしく侍らはとかくの事いとたうときらうそうのあひしりて侍にいひかたらひつけ侍ぬるときこゆそひたりつる女はいかにとの給へはそれなん又えいくましく侍めるわれもをくれしとまとひ侍てけさはたににおち入あとなんみ給へつるかのふるさと人につけやらんと申せとしはし思ひしつめよとことのさま思めくらしてとなんこしらへをき侍つるとかたりきこゆるままにいといみしとおほして我もいと心ちなやましくいかなるへきにかとなんおほゆるとの給ふなにかさらにおもほしものせさせ給さるへきにこそよろつのこと侍らめ人にももらさしとおもふ給ふれはこれ光おりたちてよろつはものし侍なと申すさかしさみな思なせとうかひたる心のすさひに人をいたつらになしつるかことおひぬへきかいとからき也少将の命婦なとにもきかすなあま君ましてかやうのことなといさめらるゝを心はつかしくなんおほゆへきとくちかため給ふさらぬほうしはらなとにもみないひなすさまことに侍ときこゆるにそかゝりたまへるほのきく女房なとあやしくなにことならんけからひのよしのたまひてうちにもまいり給はすまたかくさゝめきなけき給ふとほの　くあやしかるさらにことなくしなせとそのほとのさほうのたまへとなにかこと　くしくすへきにも侍らすとてたつかいとかなしくおほさるれはひんなし

とおもふへけれといまひとたひかのなきからをみさらむかいといふせかるへき
をむまにてものせんとの給ふをいとたい　くしきことゝはおもへとさおほされ
んはいかゝせむはやおははしまして夜ふけぬさきにかへらせおははしませと申せは
このころの御やつれにまうけたまへるかりの御さうそくきかへなとしていて給
ふ御心ちかきくらしいみしくたへかたけれはかくあやしきみちにいてたちても
あやうかりしものこりにいかにせんとおほしわつらへとなをかなしさのやるか
たなくたゝいまのからをみては又いつの世にかありしかたちをもみむとおほし
ねむしてれゐのたいふすいしむをくしていて給ふみちとをくおほゆ十七日の月
さしいてゝかはらのほと御さきの火もほのかなるにとりへのゝかたなとみやり
たるほとなと物むつかしきもなにともおほえ給はすかきみたる心ちし給ておは
しつきぬあたりさへすこきにいたやのかたはらにたうたてゝおこなへるあまの
すまゐいとあはれなりみあかしのかけほのかにすきてみゆその屋には女ひとり
なくこゑのみしてとのかたにほうしはら二三人物語しつゝわさとのこゑたてぬ
ねん仏そするてら　くのそやもみなおこなひはてゝいとしめやか也きよみつの
かたそひかりおほくみえ人のけはひもしけかりけるこのあまきみのこなるたい
とこのこゑたうとくてきやうゝちよみたるに涙ののこりなくおほさるいりたま
へれはひとりそむけて右近はひやう風へたてゝふしたりいかにわひしからんと
み給ふおそろしきけもおほえすいとらうたけなるさましてまたいさゝかかはり
たるところなしてをとらへてわれにいま一たひこゑをたにきかせ給へいかなる
むかしのちきりにかありけんしはしのほとに心をつくしてあはれにおもほえし
をうちすてゝまとはし給かいみしきことゝこゑもおしますなき給ふことかきり
なしたいとこたちもたれとはしらぬにあやしとおもひてみな涙をとしけり右近
をいさ二条院へとのたまへととしころおさなく侍しよりかた時たちはなれたて
まつらすなれきこえつる人にははかにわかれたてまつりていつこにかかへり侍
らんいかになり給にきとか人にもいひ侍らんかなしきことをはさる物にて人に
いひさはかれ侍らんかいみしきことゝいひてなきまとひてけふりにたくひてし
たひまいりなんといふことはりなれとさなむ世の中はあるわかれといふものか
なしからぬはなしとあるもかゝるもおなしいのちのかきりある物になんあるお
もひなくさめてわれをたのめとの給こしらへてかくいふ我身こそはいきとまる
ましき心地すれとの給ふもたのもしけなしやこれ光夜はあけかたになり侍ぬら
んはやかへらせ給なんときこゆれはかへりみのみせられてむねもつとふたかり
ていてたまふみちいと露けきにいとゝしき朝きりにいつこともなくまとふ心ち

し給ふありしなからうちふしたりつるさまうちかはし給へりしかわか御くれなゐの御そのきられたりつるなといかなりけん契にかとみちすからおほさる御むまにもはか　くしくのりたまふましき御さまなれはまたこれ光そひたすけておはしまさするにつゝみのほとにて御むまよりすへりおりていみしく御心ちまとひけれはかゝるみちの空にてはふれぬへきにやあらんさらにえいきつくましき心ちなんするとのたまふにこれみつ心地まとひてわかはか　くしくはさのたまふともかゝるみちにいて　くたてまつるへきかはとおもふにいと心あはたゝしけれはかわのみつにてをあらひてきよみつのくわんをんをねむしたてまつりてもすへなくおもひまとふ君もしゐて御心をおこして心のうちに仏をねんし給てまたとかくたすけられ給てなん二条院へかへり給けるあやしう夜ふかき御ありきを人ゝみくるしきわさかなこのころれいよりもしつ心なき御しのひありきのしきる中にも昨日の御けしきのいとなやましうおほしたりしにいかてかくたとりありき給ふらんとなけきあへりまことにふし給ぬるまゝにいといたくくるしかり給て二三日になりぬるにむけによはるやうにし給うちにもきこしめしなけくことかきりなし御いのりかた　くにひまなくのゝしるまつりはらへすほうなといひつくすへくもあらすよにたくひなくゆゝしき御ありさまなれはよになかくおはしますましきにやとあめのしたの人のさはきなりくるしき御心ちにもかの右近をめしよせてつほねなとちかくたまひてさふらはせ給ふこれ光心ちもさはきまとへと思のとめてこの人のたつきなしとおもひたるをもてなしたすけつゝさふらはす君はいさゝかひまありておほさるゝ時はめしいてゝつかひなとすれはほとなくましらひつきたりふくいとくろくしてかたちなとよからねとかたわにみくるしからぬわかうとなりあやしうみしかゝりける御契にひかされてわれもよにえあるましきなめりとしころのたのみうしなひて心ほそくおもふらんなくさめにもゝしなからへはよろつにはくゝまむとこそ思しかほとなく又たちそひぬへきかくちをしくもあるへきかなとしのひやかにの給てよはけになき給へはいふかひなきことをはをきていみしくおしとおもひきこゆ殿のうちの人あしをそらにておもひまとふうちより御つかひあめのあしよりもけにしけしおほしなけきおはしますをきゝ給にいとかたしけなくてせめてつよくおほしなる大殿もけいめいし給ておとゝ日ゝにわたり給つつさま　くのことをせさせ給ふしるしにや廿よ日いとおもくわつらひ給つれとことなるなこりのこらすおこたるさまにみえ給けからひいみ給しもひとへにみちぬるよなれはおほつかなからせ給御心わりなくてうちの御とのゐ所にまいりたまひなとす大殿わか御くるまに

てむかへたてまつり給て御物いみなにやとむつかしうつゝしませたてまつり給
われにもあらすあらぬ世によみかへりたるやうにしはしはおほえ給ふ九月廿日
の程にそおこたりはて給ていといたくおもやせ給へれとなか　くいみしくなま
めかしくてなかめかちにねをのみなきたまふみたてまつりとかむる人もありて
御ものゝけなめりなといふもあり右近をめしいてゝのとやかなる夕くれに物語
なとし給てなをいとなむあやしきなとてその人としられしとはかくい給へりし
そまことにあまのこなりともさはかりにおもふをしらてへたて給しかはなんつ
らかりしとのたまへはなとてかふかくかくしきこえ給ことは侍らんいつのほと
にてかはなになならぬ御なのりをきこえ給はんはしめよりあやしうおほえぬさま
なりし御ことなれはうつゝともおほえすなんあるとのたまひて御なかくしもさ
はかりにこそはときこえ給なからなをさりにこそまきらはし給らめとなんうき
ことにおほしたりしときこゆれはあいなかりける心くらへともかなわれはしか
へたつる心もなかりきたゝかやうに人にゆるされぬふるまひをなんまたならは
ぬことなるうちにいさめの給はするをはしめつゝむことおほかる事にてはかな
く人にたはふれことをいふもところせうとりなしうるさき身のありさまになん
あるをはかなかりしゆふへよりあやしう心にかゝりてあなかちにみたてまつり
しもかゝるへき契こそはものし給けめとおもふもあはれになんまたうちかへし
つらうおほゆるかうなかゝるましきにてはなとさしも心にしみてあはれとおほ
え給けん猶くはしくかたれいまはなに事をかくすへきそ七日　くに仏かゝせて
もたかためとか心のうちにもおもはんとの給へはなにかへたてきこえさせ侍ら
んみつからしのひすくし給しことをなき御うしろにくちさかなくやはと思ふた
まふはかりになんおやたちははやうせ給にき三位の中将となんきこえしいとら
うたき物におもひきこえ給へりしかと我身のほとの心もとなさをおほすめりし
にいのちさへたへ給はすなりにしのちはかなきものゝたよりにて頭中将なんま
た少将にものし給し時みそめたてまつらせ給て三年はかりは心さしあるさまに
かよひ給しをこそのあきころかの右の大殿よりいとおそろしきことのきこえま
てこしに物をちをわりなくし給し御心にせんかたなくおほしをちてにしの京に
御めのとすみ侍所になんはひかくれ給へりしそれもいとみくるしきにすみわひ
給て山さとにうつろひなんとおほしたりしをことしよりはふたかりけるかたに
侍けれはたかふとてあやしき所に物し給しをみあらはされたてまつりぬること
ゝおほしなけくめりしよの人ににすものつゝみをし給て人に物おもふけしきを
みえんをはつかしきものにしたまひてつれなくのみもてなして御らむせられた

てまつり給めりしかとかたりいつるにされはよとおほしあはせていよ　くあはれまさりぬおさなき人まとはしたりと中将のうれへしはさる人やととひたまふしかおとゝしの春そ物し給へりし女にていとらうたけになんとかたるさていつこにそ人にさとはしらせてわれにえさせよあとはかなくいみしとおもふ御かたみにいとうれしかるへくなんとの給ふかの中将にもつたふへけれといふかひなきかことをいなんとさまかうさまにつけてはくゝまむにとかあるましきをそのあらんめのとなとにもことさまにいひなしてものせよかしなとかたらひ給ふさらはいとうれしくなん侍へきかのにしの京にておひいて給はんは心くるしくなんはか　くしくあつかふ人なしとてかしこになときこゆ夕暮のしつかなるに空のけしきいとあはれに御まへのせむさいかれ　くにむしのねもなきかれてもみちのやう　くいろつくほとゑにかきたるやうにおもしろきをみわたして心よりほかにおかしきましらいかなとかのゆふかほのやとりを思いつるもはつかしたけのなかにいゑはとゝいふとりのふつつかになくをきゝ給てかのありし院にこのとりのなきしをいとおそろしとおもひたりしさまのおもかけにらうたくおほしいてらるれはとしはいくつにかものし給しあやしくよの人にゝすあへかにみえ給しもかくなかゝるましくてなりけりとのたまふ十九にやなり給けん右近はなくなりにける御めのとのすてをきて侍けれは三位の君のらうたかり給てかの御あたりさらすおほしたて給しをおもひたまへいつれはいかてかよに侍らんすらんいとしも人にとくやしくなんものはかなけにものしたまいし人の御心をたのもしき人にてとしころならひ侍けることゝきこゆはかなひたるこそはらうたけれかしこく人になひかぬいと心つきなきはさなり身つからはか　くしくすくよかならぬ心ならひに女はたゝやはらかにとりはつして人にあさむかれぬへきかさすかにものつゝみしみん人の心にはしたかはんなむあはれにて我心のまゝにとりなをしてみんになつかしくおほゆへきなとのたまへはこのかたの御このみにはもてはなれたまはさりけりと思給ふるにもくちをしく侍わさかなとてなくそらのうちくもりて風ひやゝかなるにいといたくなかめ給て

　みし人の煙を雲となかむれはゆふへの空もむつましきかなとひとりこち給へとえさしいらへもきこえすかやうにておはせましかはとおもふにもむねふたかりておほゆみゝかしかましかりしきぬたのをとをおほしいつるさへ恋しくてまさになかき夜とうちすむしてふしたまへりかのいよのいゑのこ君まいるおりあれとことにありしやうなることつてもし給はねはうしとおほしはてにけるをいとをしと思にかくわつらひ給ふをきゝてさすかにうちなけきけりとをくゝた

りなとするをさすかに心ほそけれはおほしわすれぬるかと心みにうけ給なやむ
をことにいてゝはえこそ

　とはぬをもなとかととはてほとふるにいかはかりかはおもひみたるゝます
たはまことになむときこえたりめつらしきにこれもあはれわすれ給はすいける
かひなきやたかいはましことにか

　うつせみの世はうき物としりにしをまたことの葉にかゝるいのちよはかな
しやと御てもうちわなゝかるゝにみたれかき給へるいとゝうつくしけなりなを
かのもぬけをわすれ給はぬをいとをしうもおかしうも思けりかやうににくから
すはきこえかはせとけちかくとは思ひよらすさすかにいふかひなからすはみえ
たてまつりてやみなんとおもふなりけりかのかたつかたはくら人の少将をなん
かよはすときゝ給あやしやいかにおもふらんと少将の心のうちもいとをしくま
たかの人のけしきもゆかしけれはこ君してしに返りおもふ心はしり給へりやと
いひつかはす

　ほのかにも軒はの荻をむすはすは露のかことをなにゝかけましたかやかな
るおきにつけてしのひてとの給へれととりあやまちて少将もみつけてわれなり
けりとおもひあはせはさりともつみゆるしてんとおもふ御心おこりそあひなか
りける少将のなきおりにみすれは心うしとおもへとかくおほしいてたるもさす
かにて御返くちときはかりをかことにてとらす

　ほのめかす風につけてもした荻のなかはゝ霜にむすほゝれつゝてはあしけ
なるをまきらはしされはみてかいたるさましななしほかけにみしかほおほしい
てらるうちとけてむかひゐたる人はえうとみはつましきさまもしたりしかなな
にの心はせありけもなくさうときほこりたりしよとおほしいつるにゝくからす
なをこりすまに又もあたなたちぬへき御心のすさひなめりかの人の四十九日し
のひてひえの法花堂にてことそかすさうそくよりはしめてさるへき物ともこま
かにすきやうなとせさせ給ぬきやう仏のかさりまておろかならすこれみつかあ
にのあさりいとたうとき人にてになうしけり御ふみのしにてむつましくおほす
もんさうはかせめして願文つくらせ給ふその人となくてあはれとおもひし人の
はかなきさまになりにたるをあみた仏にゆつりきこゆるよしあはれけにかきい
て給へれはたゝかくなからくはふへきこと侍らさめりと申すしのひ給へと御涙
もこほれていみしくおほしたれはなに人ならむその人ときこえもなくてかうお
ほしなけかすはかりなりけんすくせのたかさといひけりしのひててうせさせ給
へりけるさうそくのはかまをとりよせさせ給て

なく　くもけふはわかゆふしたひもをいつれの世にかとけてみるへきこのほとまてはたゝようなるをいつれのみちにさたまりてをもむくらんとおもほしやりつゝねんすをいとあはれにし給頭中将をみ給ふにもあいなくむねさはきてかのなてしこのおひたつありさまきかせまほしけれとかことにおちてうちいて給はすかの夕かほのやとりにはいつかたにと思まとへとそのまゝにえたつねきこえす右近たにをとつれねはあやしと思なけきあへりたしかならねとけはひをさはかりにやとさゝめきしかはこれみつをかこちけれといとかけはなれけしきなくいひなしてなをおなしことすきありきけれはいとゝゆめの心ちしてもしすりやうのこともものすき　くしきか頭の君にをちきこえてやかていてくたりにけるにやとそ思よりけるこのいゑあるしそにしのきやうのめのとのむすめなりける三人そのこはありて右近はこと人なりけれは思ひへたてゝ御ありさまをきかせぬなりけりとなきこひけり右近はたかしかましくいひさはかんをおもひてきみもいまさらにもらさしとしのひ給へはわかきみのうへをたにえきかすあさましくゆくゑなくてすきゆく君はゆめをたにみはやとおほしわたるにこの法事し給てまたのよほのかにかのありし院なからそひたりし女のさまもおなしやうにてみえけれはあれたりし所にすみけんものゝわれにみいれけんたよりにかくなりぬることゝおほしいつるにもゆゝしくなんいよのすけ神無月のついたちころにくたる女はうのくたらんにとてたむけ心ことにせさせ給またうち　くにもわさとし給てこまやかにおかしきさまなるくしあふきおほくしてぬさなとわさとかましくてかのこうちきもつかはす

あふまてのかたみはかりとみしほとにひたすら袖のくちにけるかなこまかなることゝもあれとうるさけれはかゝす御つかひかへりにけれとこ君してこうちきの御返はかりはきこえさせたり

せみのはもたちかへてける夏衣かへすをみてもねはなかれけりおもへとあやしう人ににぬ心つよさにてもふりはなれぬるかなと思つゝけたまふけふそ冬たつ日なりけるもしるくうちしくれて空のけしきいとあはれなりなかめ暮し給て

すきにしもけふわかるゝも二みちにゆくかたしらぬ秋のくれかななをかく人しれぬことはくるしかりけりとおほししりぬらんかしかやうのくた　くしき事はあなかちにかくろへしのひ給しもいとをしくてみなもらしとゝめたるをなとみかとの御こならんからにみん人さへかたほならす物ほめかちなるとつくりことめきてとりなす人ものし給けれはなんあまりものいひさかなきつみさりところなく